

## 日露戦争の疾病史的研究

——赤痢・腸チフス流行構造の解明と対策の実態把握を中心に

加藤真生 日本史学分野・専門 博士後期課程2年

本プロジェクトは、日露戦争における赤痢・腸チフスの流行実態と日清戦争後に赤痢・腸チフス対策がいかなる形で構築され、実践されたのかを検討するものである。これまで、筆者は戦死者の約9割が病死者であった日清戦争のコレラと赤痢を事例に、その流行の内実を検討し、日本陸軍は海と陸で質の異なる疾病経験をしたことを明らかにしてきた。この成果から筆者は、日清戦争での疾病経験を通じて、海外の陸と海への環境適応が日本の対外進出上不可欠となったことが明らかになったと考えている。日露戦争ではコレラや赤痢といった感染症は、日清戦争に比べて抑制されたと知られているため、日清・日露戦間期における医学研究により、大陸進出上の環境的な問題をある程度克服できたと考えられる。この点について先行研究では、具体的な分析がされないまま日本独自の研究と実践の結果という一国的な評価を下している。これに対し筆者は、同時代のヨーロッパ各国軍隊においても感染症対策が進められていたことに注目し、ヨーロッパとの交流をふまえて日露戦争を検討すべきではないかと考えている。以上の問題意識をふまえ、本稿では調査をもとに、①「陸の疾病」であった赤痢・腸チフスの流行構造について、②ヨーロッパにおける軍事医学ネットワークの形成と赤痢・腸チフス対策上の北清事変の意義について簡単にまとめた。

まず、戦時の赤痢・腸チフスの流行構造について。中国東北地方は乾燥地帯であり現在でも貧水地帯として知られ、朝鮮半島は平地の少ない山間地域である。このように元来水資源の獲得が困難な地域では、水質の良い水（水質検査を経て良好とされた水）を、軍隊の需要に堪えうる量で安定的に供給し続けるのは困難であった。この結果、戦時下では人為的な水不足状態が発生し、兵士たちは渇きを満たすために汚染水を摂取したため、赤痢・腸チフス発症者が生じるに至った。さらに、軍隊の尿尿による都市村落の汚染に伴うハエ大繁殖により、赤痢・腸チフスが流行するに至った。ハエ自体は朝鮮半島や中国東北部に分布していたが、日本軍による尿尿汚染の結果ハエが繁殖しやすい環境が形成され、そこで大量に生じたハエが赤痢患者の糞便に接触し、菌が伝播したのである。つまり、戦時の感染症問題は朝鮮半島に大量に人口をかかえた日本軍が流入したことによる環境変動に伴って生じた現象であった。

次に、ヨーロッパにおける軍事医学ネットワークの形成と赤痢・腸チフス対策上の北清事変の意義について。19世紀のヨーロッパ各国軍隊では、戦・平時ともに感染症による兵士の死亡率の上昇が問題となっていた。こうした中で、19世紀末には万国医事会議（International Medical Congress）といった国際的な医学、衛生会議に軍事医学部会が設けられ、ヨーロッパ各国軍医が医学的な議論を深め、各国の経験やそれにもとづく医学的な知見が共有された。なお、日本も1887年から参加している。赤痢・腸チフスに関しては、1900年の第13回万国医事会議パリ大会において集中的に議論された。この年は北清事変も生じた年であり、1900年時点でのヨーロッパ各国の赤痢・腸チフス対策の成果が持ち込まれたと考えられる。実際、日本陸軍軍医部は各国の衛生対策について調査を行っており、その成果は「北清各国軍隊衛生状況視察復命書」（陸上自衛隊衛生学校医学情報史料室所蔵）としてまとめられた。北清事変は各国の研究成果を実見し受容することができた場であった（日向玲理「日清・日露戦争期における日本陸軍の「仁愛主義」——衛生事業をめぐる受容と実践」『駒沢史学』87、2016年も参照）。

なお、日露戦争では様々な衛生対策が取られたが、どの実践が効果的でそれがどのように生まれたのか、という情報交流と実践の関係性について、また国際会議の実態と日本との関係性などについては、筆者の力不足のため検討中であり、今後の課題としたい。